



# 町民文芸

## 只見短歌会 令和六年一月詠草

妹より送られて来し寒菊を活ければ小さき花日毎咲きつぐ  
馬場 八智

降雪も少なく静か元旦や夕こく地震あわてふためき  
関谷登美子

姑寝かす真冬の夜は長かりき読みやる絵本の文は短し  
目黒 富子

笑みだけで親戚中を魅了する息子の姿アイドルのごと  
立花 奏音

冬の朝厨に長き日の差してかぎろひの影ゆらゆら映る  
新国由紀子

手毬てんまりに思ひを込めてひと針のかがるる糸の色を選びぬ  
渡部ヨリ子

(出詠順)

## 只見俳句会 一月定例会

厚物や袖畳みして重ねおく  
初富士や三角帽子白に黒  
一穂

スリッパの脱ぎ捨ててあり大晦日  
瀬戸内の冬夕焼けに立つ夫婦  
修 一

初春や富士を背負いて走る人  
舟唄を魚にぬる爛冬銀河  
信

子供等の駆け込むバス停息白し  
靴底はあたる指先冬ぬくし  
都

雪嶺や呼吸整う太極拳  
若水をあげて手合わす幼き子  
一 恵

初雪や泥長靴で出でにける  
北国の孫へ半纏冬初め  
真理子

## 日高俊平太 指導

冬の朝夫のしぐさに振り返る  
小春日や散歩の出合に立ち話  
睦 子

出勤す街灯ともる冬の朝  
マスクして頬温もりぬ歩あそび行神  
紺 青

能登地震のみで埋ずまる初日記  
女孤の夢見し朝の初鏡  
恒 夫

大笨に不揃の茄子畑仕舞  
冬至南瓜難儀してまず半分はんぶんに  
礼

